



大阪府立北野高等学校図書館

第4号

平成28年9月30日発行

図書ニュースの担当になった時、誰の本でもよい（図書館にある本の紹介なら）、と言われていたので、その時は藤沢周平か、シェイクスピアに決めていた。しかしよく考えてみれば、生徒の皆さんにできるだけ図書館にある本を読んでもらえるようにする、というのがこのニュースの狙いなら、この両巨匠について熱く語っても、高校生の皆さんが（よほど渋い好みでない限り）図書館に足を向けることはあまりなさそうな気がしてきた。図書館で新刊書を購入する際には、図書館の教員がそれぞれ推薦図書を持ち寄り、皆で協議して決めるのだが、その時にいつも何冊か推薦がかぶる本が出てくる。つまり複数の教員が（生徒にとって）これは面白い、為になる、良書なのではないか、と考えるということだ。そういう場合、まず「はずれ」はない。その中の一つが浅田次郎の「帰郷」(913/A31/14)である。元々この人気作家は嫌いではなかったが、最近は何となく、日本ペンクラブ会長の仕事の方が忙しいのかなあ、と思わせるさらりとした作品が多いような気がしていた。「帰郷」は戦争の悲惨さをテーマにした短編集だが、あの辛い時代に精一杯生きた人々の「人」としての矜持が、時に明るく健気に、時に残酷に暗鬱に描かれていて、読み終わったあと、果たして、豊かで平和な時代に生きているはずの我々の方が幸せなのだろうかと考えてしまう。この人は元々自衛官だったこともあってか、戦争を扱った作品は妙に説得力がある気がしてならない。表紙には戦時中の実際の写真が使われていて、つい端っこの細かいところまで見入ってしまう。前期末考査も終わりホッと一休み、(自分も含め)戦争を知らない生徒の皆さんに、この秋ぜひ図書館に足を運んで読んでもらいたい。これからの時代を生きる若い人に、戦争とは、ああこんなものだったのか、と何か感じてもらえると思う。

後の紙面を利用して、図書館にある浅田次郎氏の他の作品を紹介させてもらう。どの作品も読んで「はずれ」なしです。多くは映画化、TV化されているのですが、やはり何ととっても文字が一番です！

***壬生義士伝 (913/A31/4-1)**

主人公の吉村貫一郎は南部藩屈指の剣豪であったが貧しい下級武士の出で、妻子を養うため、南部藩を脱藩した。後に、その剣の腕を買われて「みぶろ」と蔑称された新選組の隊士になった。必死にお金を作っては故郷の妻子に送る、守銭奴と周りから蔑まれた男には、実は守りたい武士の誇りもあった。中井貴一や渡辺謙主演で映画にもドラマにもなった作品。映画やテレビでは主人公のふるさと訛りが優しく、快く耳に響いて、方言の美しさを痛感した。でもまず本で読んでください。

***一路 (上下巻) (913/A31/10-1~2)**

本の題名は美空ひばりの歌う「人生一路」とか何かそんな意味だと思っていたら、弱冠19歳で父の突然の死により家督を相続し、代わりに参勤交代を差配することになった主人公の名前だった。二百年以上前に記された家伝「行軍録」を唯一の手がかりに、古式に則った行列を仕立て、江戸を目指して一所懸命に己の本分を全うしようとする。いわゆるロードムービーで、行く手に様々な困難が待ち受けていて、個性豊かな登場人物達が協力して難題を解決しながら、それぞれの役目を果たしていく。藩主の叔父など超極悪人が出てくるのだが、きちんとその人物の心の闇の理由も描かれている。若い人が古式ゆかしき伝統にこだわるという、ちょっぴり現代の若者へのメッセージもあるのかなと思ったりもするのだが、そんなことより読後が爽やかで元気も出ることに間違いなしです。先頃、人気の若手俳優主演でTV化されました。行軍録なので、昔の日本の地理の知識などあればよりおもしろい。

*黒書院の六兵衛（上下巻）（913/A31/11-1~2）

日経新聞朝刊の連載小説。時代は幕末、江戸城開城のおり、たった一人黒書院（江戸城内の院）に御書院番士として無言で座ったまま譲らない的矢六兵衛という人物がいた。無血開城のために追い出すこともできず、その対応を任されたある役人の視点で、その顛末の一部始終が描かれている。当時は武士の身分を金で売るということもまかり通っていた。主人公はその身分を買ったと思われるが、何せ、一言も話さない、という面白い設定である。幕末の動乱期、武士が皆、それぞれの筋を通せずにいた中、たった一人無言の抗議を続ける毅然としたその姿に、周りの者が次第にこの人物に心を移していく様子が丁寧に描かれている。勝海舟など、お馴染みの幕末の有名人も登場するが、最後まで主人公の謎は明らかにされないまま物語は進んでゆく。ぜひ想像力をたくましくして読んでください。これはまだTV化されていません。

ここまでの紹介では、浅田氏の作品は時代ものばかり、とってしまいが、全くそうではなく、現代もの、戦争もの、会社員もの、守備範囲は広いです。とりあえず題名だけ挙げると、「終わらざる夏」、「鉄道員」、「王妃の館」、「獅子吼」、「中原の虹」、「ハッピーリタイアメント」、「きんぴか」、「我が心のジェニファー」、「神座す山の物語」など、ほかにも良い作品がたくさんあります。「獅子吼」と「きんぴか」以外は全部図書館の浅田次郎のコーナー（913/A31）にあるので立ち寄って下さい。

ちょっと浅田次郎ばかりになってしまったので、ここからは他の作品（新刊も含めて）もご紹介します。ジャンルはバラバラですが、自分の一押しで図書館に入れてもらった作品が中心です。

*「世界で一番美しい犬の図鑑」（645/P1/1）現在は入ってすぐの展示資料コーナーにあります。犬好きなのに犬が飼えない人は読んでください。目の保養になります。表紙の犬は本当に世界一美しい！

* 「ファインマン語録」(289 / F19 / 1) 型破りな天才物理学者の残した味わい深い言葉の数々があふれんばかりに出てきます。ちょっと昔は英語入試問題の出典の常連でした。物理音痴でも OK!

* 「チューディ先生のなるほど英語レッスン」(834 / T4 / 1) 和製英語編 CD 付き。なるほど、ああそうだったのか! の連発です。堅苦しくなく英語の教養を身につけたい人にお薦めです。他にもシリーズがあるのでぜひ。

* 「誤訳の常識」(801 / N7 / 3) 中原道喜氏の(歴史的)名著。誤訳という観点から英文理解の本質にせまります。例文一つとってみても、よく吟味されていて(ほとんど有名文学作品からとられている)味わい深い。

* 「誤訳の典型」(801 / N7 / 2) 上記の先行版。両書とも受験勉強に使ってみようと割り切って読んでも十分対応できます。但し一筋縄ではいきません。教養がついて受験にも役立つなら一石二鳥です。

* 「向田理髪店」(913 / O34 / 8) 奥田英朗著。北海道の寂れた炭鉱町にある理髪店を訪れる人たちが繰り広げる心温まるお話の数々(先ごろ似たような書物が直木賞をとりましたが、これだって・・・)。

最後に、昔「ああ素晴らしきかな、我が読書人生」などと、大それた題で図書館報に自分の読書の歴史めいたようなことを書かせてもらったことがあります。偉そうなことを書いたものだと、今更ながら恥ずかしく思うのですが、それでもやはり自分にとって読書ある日々は大切に、楽しく、今も(多分これからも)そう思っています。